

# 葡萄文様の一展開

——薬師寺金堂台座の文様をめぐって——

## 一 薬師寺文様の特徴

オリエント地方に発生したと推定される葡萄モチーフの文様は、極東に到っても様々な意匠として使われた。仏教美術においては、工芸品はもとより、瓦などにもこの文様は少くなく、また仏像荘嚴の一部にこの意匠が施こされることもあった。

薬師寺金堂薬師如来像の須弥座上框上段には、著名な葡萄唐草文（挿図1）が浮彫であらわされている。仏像の台座のこの位置にあらわされる文様としては珍しい種類といえよう。

薬師寺の文様を中心に、この種の意匠について考えるに当たって、葡萄の自然の形態をまず把握しておく必要がある。『原色日本植物図鑑』（保育社 昭和五十八年）の「ぶどう科」の解説は

多くはつる性の低木で巻ひげを持ち、時に草本または直立する木本のこともある。葉は互生、単一または掌状に複生し、托葉がある。

とあり、『世界大百科辞典』二二六（平凡社 昭和四十七年）には

つる性であり、巻ひげによって他の物体にからまる。花房および巻ひげは葉と対生し、巻ひげは連続または断続的につる上に

着生する。

のように記される。葉に裂のない単葉と深裂のある掌状葉の二種があること、果実房（花房）・巻ひげが葉と対生すること、托葉があることなどが、本稿にとつて必要な事柄である（以下各部の名称を、蔓、葉へ単葉・掌状葉、果実房、巻ひげ、托葉とする）。

西アジアにおいてはかなり写実風な葡萄唐草文が存在するが、中国では現実の形態のままに意匠化されることはまず無い。従つて自然な生態の理解は、本来あるべきものが無いときや、他の要素がデザインに加えられたときの、分別の基準となる。

林良一氏はかつて、葡萄文様全体の流れの中で、薬師寺文様の特徴を次の三点に要約された<sup>1)</sup>。氏の論文から引用すると、

挿図1 葡萄唐草文 薬師寺金堂薬師如来像台座

1 葡萄の房を葉が包むこと。  
 2 葡萄の房及び葉に大きい蔓形をもつこと。  
 3 蔓形や若芽がきれこみをもつ渦巻形、恰も靈芝雲風な形式をなすこと。  
 とある。氏はイラン系のこの文様が、東漸に従って、半パルメット唐草系と自然葉唐草系の二形式に分化したとし、後者に属する薬師寺文様にかんがりの装飾性を認めた上で、このような特徴を抽出しておられるのである。

1・2は、葡萄の自然な形態から見ての不自然な点の指摘だが、文様化された形を自然形態の何に対応させるかは、解釈により差異が生ずることもある。例えば2については、葉と果実房の付根から左右に岐れて出る二条の雲気状のものを、氏のようにこの部位に実際にはない蔓とするよりも、自然の形態からいえば、葉と対生し、果実房ともに出ることのある巻ひげと見る方が良いのかも知れない。しかし果実房の付根にあるこの形は北魏時代以来認められる伝統的なもので、また後で詳述するように、中国では葡萄と他の花との合成の現象が顕著に窺われるのであって、それらの視点からすれば、蔓や巻ひげではなく、中国固有の合成された花が変形しながらここに現れているとも推考される。

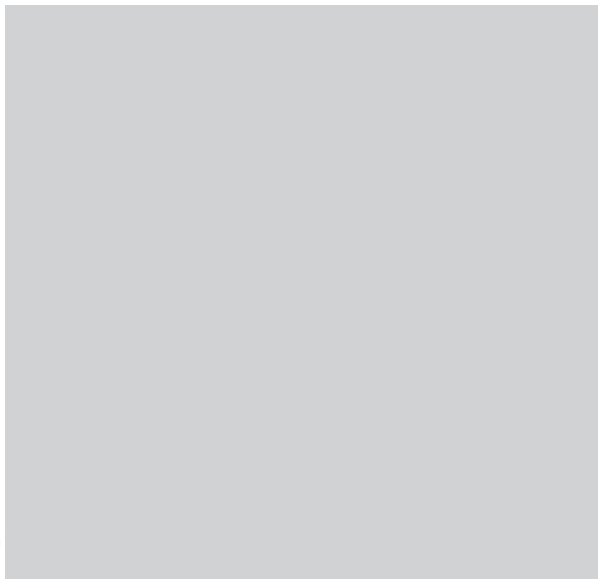
3は、植物各部の中国的変形についての言及であるが、蔓が枝岐れするところに出る二条の雲気は、氏のいわれる新芽よりは、托葉が正確であろう。

この文様の特徴は、この他に  
 4 葉の掌状裂が左右対称でないものがある。  
 という点も認められる。

5 また表現上の問題として、葉の一部が裏返っていることなどから、風を受けたように一定方向への動きを感じることができるといえる。  
 1-4のように現実の葡萄の形からの幾つかの変形が指摘されるのだが、それは、当時の日本人びとの馴染みの薄さからくる間違いというよりは、西アジア起源のこの文様が、中国において国風化の段階を経たあとの形式を、わが工人が承継いだためとみなした方が適切であろう。

## 二 初唐期の様相

中国化した葡萄文様は、まず海獣葡萄鏡に見られるが、この鏡は形式上様々な分類が試みられており、一概には論じられない。唐代



挿図2 海獣葡萄鏡 白鶴美術館  
 七世紀のものと考えられている大型の海獣葡萄鏡(林氏の分類による唐式鏡第一類)を見ると、ここには蔓・果実房・巻ひげ・葉という基本的構成要素を備えた葡萄が写生風に表現されている。ここで注目すべきは、葡萄やパルメット

とは異なる別の花形が付いたり、葡萄の果実房の付根に花弁または萼状のものが現れることで、自然の形態に変形を加えていることが推定される。特に後者の、果実房の付根の花弁または萼状のもののように、薬師寺文様の特徴のひとつがここに見られることは重要である。この期の代表作白鶴美術館鏡(挿図2)を例に薬師寺文様と比べると、この鏡の葡萄には、裂のない単葉とこれのある掌状葉とがあつて、写生風な趣きを留めているが、いずれも風を受けたかのように飜えり、一部裏返つており、さらに掌状葉の裂が左右相称に入っていないなどは共通する要素である。果実房の付根に花弁または萼状のもの付くことともに、念頭に置いておく必要がある。

このように、海獣葡萄鏡にあらわされた葡萄は、薬師寺文様と遠くで通じ合うかに思われる表現がすでに現れていることが知られ、これをこの文様の中国化の一段階とみなすことができる。しかし薬師寺文様の大きな特徴であつた、葉に包まれた果実房はこの形式の鏡にはないのであつて、別の資料を探さなければならぬ。

泉屋博古館の花枝八花鏡(図2)と称される鏡は、すでに林氏も挙げておられるものだが、薬師寺の文様、引いては葡萄文様の中国的展開を考える上で極めて興味深い。西安東郊の王家塚八四七(四)第三十四号唐墓からも全く同形式の鏡が出土しており、唐代に流行した図案と推察される。

四本の花枝が四方に放射状に配されるという単純な図柄で、唐草のような連続文様ではなく、末端に表皮のめくれの付いた単独の花枝である。いずれも下方に托葉が生える。その先で二つに岐れた枝先には、葡萄の掌状葉と、別の種類の花が付き、うち二本には葡萄の果実房が見られる。

図柄の配置を図版に従つて

a  
A B

b

とすれば、A Bは花と葡萄葉が対生し、いずれにも大小二つの果実房が現れる。大の果実房は花の中から半分ほど出ており、小もまた花状のものから出て、全体が掌状葉に包まれている。a bもまた、花(開花した正面形・蕾の側面形)と葡萄葉が対生し、それぞれの葉には蕾形が包まれているが、果実房は現れない。

葡萄樹に、全く別種の花や蕾が付き、その花の中から葡萄の果実房が現れ出ていることなどを考えると、葡萄樹と他の空想上の花との合成的性格が顕著である。

また、それぞれ形態の異なる四本の花枝を、合成植物の生成の過程と見ることも可能で、蕾(a)、開花(b)、花から葡萄の実が出る(A・B)という各段階とみなすことができる。

この鏡の意匠には、海獣葡萄鏡で見られた要素を、合成植物とその生成という方向に大きく展開していることが窺える。この見方に従えば、果実房の付根にあるのは、萼というよりは想像上の花を表現したと見る方が妥当である。空想の花形が葡萄の実を生み出すという、中国流の生成の觀念がこの意匠の根底にあるかに推測される。

以上のように、果実房を葉が包み、その付根に雲気状のものが付く薬師寺文様の原形を、この鏡の意匠に見出すことができるといえよう。この雲気状のものが花形の変形であることはいうまでもない。A Bの掌状葉の先端が、風に当たったかのように一部裏返つている点も共通の表現として見逃せない。



この鏡の図様が行われたのが初唐の頃だったらしいことは、後述のように、いっそう複雑化したこの系統の図様の鏡が盛唐期に現れることから推定されるが、その前に、この点を確かめ、さらにこの図様の種々相を窺うために、次に別の資料を検討したい。

挿図3はシレンの『中国彫刻』<sup>3)</sup>に収められている如来坐像で、実見していないので細かな記述はできないが、深い裂のある葡萄の掌状葉を光背とし、その中央に果実房をあしらっている。しかも果実房の根元には大きな花形が付き、前記唐鏡や薬師寺文様と一致している点は注目される。この像には麟徳元年(六六四)の銘があるとい、仏像の作風もこの頃のものとして適当である。確かな作品であれば、初唐期にこの種の文様の行われていた一証左となる。

挿図3 如来坐像

ことからすると、葡萄文様が、パルメットとは別の空想花との合成の様相を顕著にあらわしたのは初唐の頃と推定される。

### 三 盛唐期の様相

このような状況を承けて、盛唐期のこの文様はいっそう華やかで生き生きとした趣きを増していったかに推定される。今、この期の中国中央の適切な資料に欠けるのであるが、それを髣髴するに足る、唐からの舶載の可能性の強い正倉院宝物二点、新羅の瓦当文、敦煌出土の錦裂について述べたい。

先に見た泉屋博古館鏡の文様の原則に沿った発展の相の窺えるの

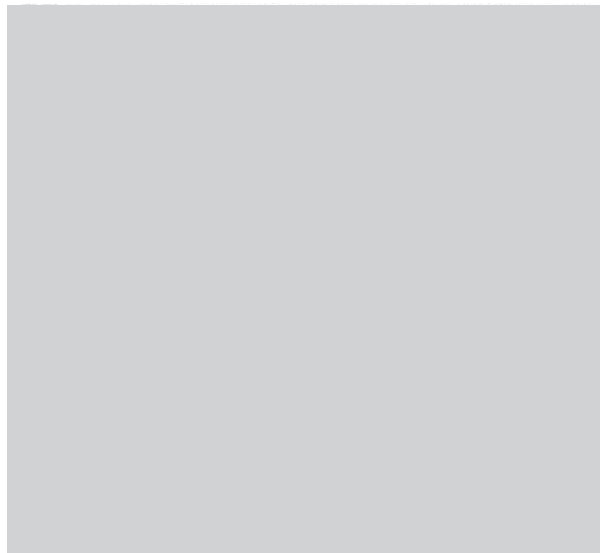
次に調露元年(六七九)の泉男生墓誌蓋表にある葡萄文様に着目したい。<sup>4)</sup>挿図4はその一単位で、唐草の波の間に果実房、葉、花などがあらわされる。果実房の付根に四枚の花弁の付くのは、空想花の中から果実の出る表現の一例と見られ、蔓の先に咲く正面形の花とともに、泉屋博古館の唐鏡の合成花の特徴を忠実に受け継いでいる。二枚の葉のうち、下方分は全形をあらわし、上方のは一部裏返っている。

挿図4 泉男生墓誌蓋

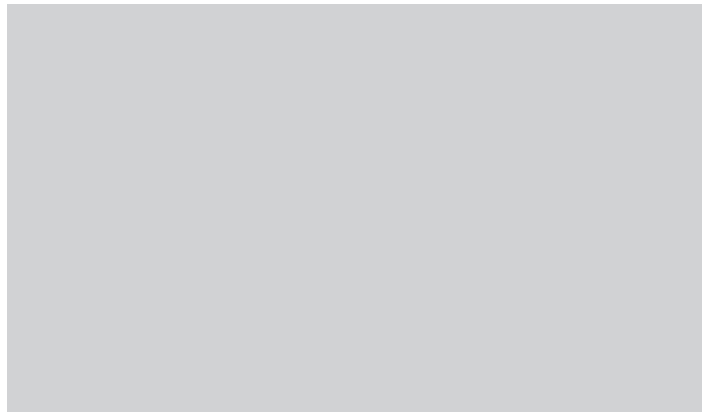
このようにこの文様は、葡萄の蔓・葉・果実房・巻ひげと、別の空想花との合成植物文といつてよい。果実房や空想花の表現上の特色が、前記唐鏡のそれと正しく対応している

が、正倉院の鸚鵡花枝八花鏡(図3)である。『東大寺献物帳』に「八角鏡一面」とあるものに相当する。<sup>(5)</sup> 聖武天皇遺愛の品で、その迫力ある表現からして唐からの舶載と考えてよいだろう。嘴に葡萄の枝をくわえ、頸に綬を懸けた二羽の鸚鵡が、右廻りに回旋しながら激しく飛び交う様があらわされる。

二本の枝は全く同形ではなく、左方がやや大型である。いずれも泉屋博古館鏡のように途中で枝岐れし、果実房と葉を付けるが、さらに別の葉を付けるもう一本の枝が出ている。蔓、果実房、葉(掌状葉と単葉)、托葉などが認められ、さらに左方の蔓の途中にある雲気は巻ひげの変形かとも見られる。葉の根元が雲気状に変化するものは



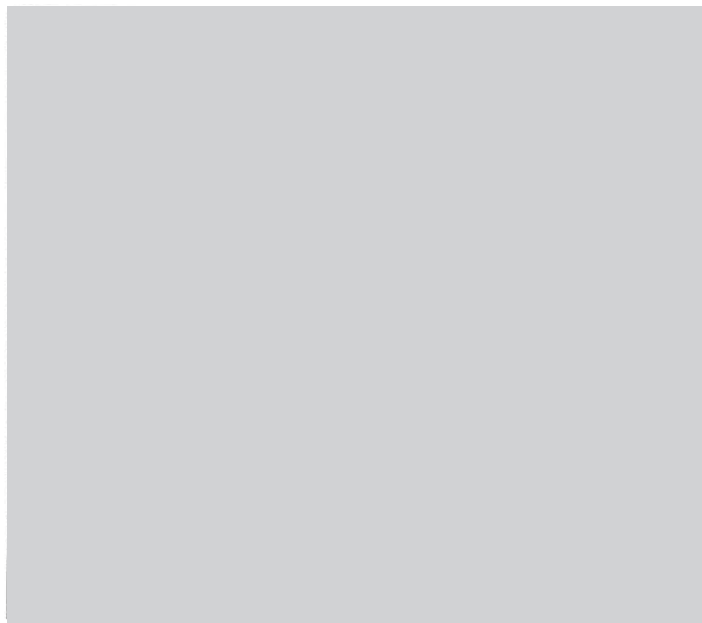
挿図5 曝布彩絵半臂 正倉院



挿図6 軒平瓦

薬師寺文様に酷似する。また果実房の付根にある花形、花の蕾を包む葉などのほかに、翻えり一部が裏返る葉、托葉の形などは、泉屋博古館鏡の形式とよく一致し、そこからの発展形と考えられる。しかし、葉の先端が渦巻き状になり、また今までになかった単葉が出現するなど、全体に多様で盛んな表現となるのは、盛唐という時代の故であろう。

これに近い葡萄樹は、同じ正倉院の曝布彩絵半臂(挿図5)にある。獅子の噛む葡萄の枝にはよく繁った葉が付き、その一枚に抱かれるように果実房があり、根元には花形が付く。この種類の意匠が盛唐期に極めて旺盛な姿を示していたことが推定できるとともに、果実



挿図7 錦裂 ギメ博物館

房よりも、繁茂する葉が中心となるデザインへと移行する傾向にある点は留意しておく必要がある。

韓国慶州南山麓の天恩寺址出土の葡萄唐草文軒平瓦(挿図6)は、以上のような泉屋博古館鏡に始まる筋合の葡萄文様で、薬師寺文様に非常に近いだけでなく、それを超えて複雑、華麗である。文様は、左右から伸びる葡萄唐草が中央で接し合う構成である。細部を見ると、蔓(二重となる)、果実房、葉、托葉などから成り、葉と対生する雲気様のものが巻ひげの変形かと推察される。

薬師寺文様と比較すると、果実房の付根にある大型の花形(三弁花)、蔓の分岐点に出る雲気化した托葉、一部が裏返った葉などの正確な一致は注目に値する。しかし一方、果実房が葉に包まれないことや、葉が三裂となり左右相称となることなどは相違点として指摘され、さらに蔓が二重となり、単葉が現れるなどの複雑な要素が加わる。薬師寺文様から一段階展開した様相を示すといえよう。

泉屋博古館鏡や薬師寺文様の系統の上でありながら、さらに装飾的となったものとしても一例、敦煌出土の錦裂(ギメ博物館蔵)の文様を挙げることができる(挿図7)。これは鳳凰の周りをまわく囲む葡萄唐草文で、「吉」の字のあることから、中国での製作と知られる。

唐草の丸文は四分割されるようで、それぞれは、唐草の三つの波の中にある葉一、果実房一を基本単位とする。果実房の付根に見られる花形(三弁花)、一部が裏返った葉などはこの系統の文様の特徴といえるが、蔓の分岐点と一本の枝の先端に別種の花が現れることは、葡萄と他の花の合成植物としての傾向を大きく推進したことによるものと考えられる。薬師寺文様と比べると、果実房および葉が巻ひげと対生すること、蔓の途中で生えた葉と枝蔓が別の蔓に巻き付く

などの描写的な要素が顕著となる。このように見るとこれは、この文様の系統に沿いながら、写実的な方向へと大きく展開した一例といえ、あるいは中唐まで下ることも考えられる。

以上二節にわたって挙げた葡萄唐草文が同一系統に沿ったものであることは明らかであろう。泉屋博古館鏡に始まる初唐の諸作品には、空想花が葡萄の果実を生み出すという合成植物文としての初源的要素が強いが、デザインとしては単調さがあつたのに対し、正倉院鏡以下の盛唐期の諸例は、合成植物文的性格を強く留めながらも、より具象的かつ装飾的に展開した。

薬師寺の文様がこの展開の線上にあることは、合成植物文を構成する一々の要素や、表現の特殊性の各一致から見て間違いない。しかし、図様がやや説明的であるだけにその分装飾性に欠けることからすると、この文様は初唐期の諸作例の様相を反映するものと推定される。

#### 四 蔓主体の唐草

わが国における葡萄文様の恐らく最初期に位置する薬師寺金堂台座の文様は、わが国の独創や改変ではなく、中国のこの系統の文様をそのまま採用したであろうことは想像に難くない。中国からの漸新な文様を参考に、わが工人が造型化したとき、全く日本的な作意の介入する余地が無かつたとはいえないが、この文様に限れば大筋において初唐風を忠実に襲っているといえる。

近年、薬師寺金堂の基壇から発見された透彫飾金具の葡萄文様を



(挿図8)、台座のそれと比較することで、そのことを確かめてみたい。これは、金堂北辺の裳階地覆石の抜取りの際の埋土中から検出されたとい<sup>8</sup>、創建時の埋納品とはいえないけれど、明らかに天平時代のものである(四・四×四・五センチ)。蓮蕾型鈴が伴出していることからすると、法隆寺の金銅装唐組垂飾と称される堂内荘嚴具<sup>9</sup>と同じ種類のものの一部と推定される。当寺が何らか罹災した後埋められたのであろう。盛んに造営の行われた当寺の平城創建期の遺品の可

能性は大きく、その見方によれば、台座の同文様との文様構成上の相違に興味がもたれる。

挿図8 飾金具 薬師寺

挿図9 金鈿荘大刀 東大寺

この意匠は途中から先を失って、完形品ではないが、構図の大略は辿れる。大振りて左右相称となる蔓の曲線が文様の基本となり、そこにやはり相称的に小さな葡萄の果実房、カエデのような葉、巻込みの強い巻ひげが付く。果実房の付根の花形も巻ひげとほとんど同形である。蔓と葉が重り合うことはなく、平面性が強調される。前述の描写的な文様の系統とは異り、蔓主

体の抽象性の強い葡萄文様であり、台座の文様とは全く異なる性格といえよう。

これに極めて似た文様のあるのが東大寺の金鈿荘大刀である。特に鞞尻のそれは(挿図9)、蔓が左右相称の曲線を描き、巻ひげのような花形の付く果実房、カエデ形の葉、小さな巻ひげを配するなど、共通の文様原理の存在を思わせる。蔓や葉が互に重り合わず、平面的な趣きも非常に近い。ただし大刀の文様には、一部に花形やパルメット形が出ている点異なるが、薬師寺透彫板の欠損部にこのような表現が無かったとはいえない。

この大刀は東大寺大仏殿の創建時の鎮壇具のひとつである。従ってこれが天平時代に流行した文様であることは間違いない。

この種の文様は、和銅四年(七一)の法隆寺五重塔西面の分

挿図10 金棺 法隆寺五重塔初層西面

挿図11 葡萄唐草文染韋 東大寺

舍利仏土相の金棺側面に早くも見られる(挿図10)。左右から伸びてくる蔓に非常に多くの巻ひげが出、やや細長い果実房の付根には花形が付く。蔓の先端に別の花形があることや葉が全く無いことなどは異色であるが、蔓主体の文様の系列にあるといつてよいだろう。

林氏のいわれる、六朝時代以来行われた半パルメット唐草系のパルメットが消滅して、蔓主体の唐草文へと変化する途上のものと見ることも可能である。東大寺大刀の文様に退化したパルメットがあったことも、この系統に特有の文様の痕跡と考えれば理解できる。

法隆寺五重塔心礎に納められた金製卵形透彫容器にも、蔓主体で小さな果実房の付く同系の文様があることから、これや前述の塔本金棺が、塔の完成した和銅四年をあまり隔らない頃のものとするれば、平城遷都直後に、薬師寺台座とは別系の葡萄文様がすでに存在していたことが知られ、注目される。

この文様の特徴である、蔓を文様の中心に据えて、それをさらに展開したものが、東大寺の葡萄唐草文染草である(挿図11)。蔓が巻ひげと渾然一体となって、どこまでも伸び回転する様が、力強いタッチで描かれている。この図柄も相称的に配され、根元に花形の付く果実房(花形と果実の粒との判別が難しいが、根元にあるやや縦長の粒が花卉か)、カエデ形の葉など、共通の要素がある。製作地について議論の分れるところだが、盛唐期に流行したこのような文様を反映するものである。

以上のように見てくると、自然な葡萄の形態に中国流の合成植物という要素を加えながらも、それを具象風にあらわしていた薬師寺台座の文様に比べて、透彫板のそれは全く別の系列に属するもので、しかも平城薬師寺創建期の天平時代初期にはそれがすでにわが国に

移入されていたと推定される。いわば前者が西アジア的要素を留めた描写的な文様なのに対し、後者は抽象的で意匠性の強い文様といえよう。

以上は、透彫板が、平城京において薬師寺が建立されていた時期の遺品としての論であるが、これと台座の文様とは、同じ寺内に伝えられたにもかかわらず、文様としての系統の異なるのはもちろん、かなり隔りのある時期の文様形式を反映しているといえるのである。

## 五 結 び

薬師寺金堂薬師三尊像の造立時期に関する論争は、古くから移坐説と非移坐説に分れて行われている。前者は、薬師寺に無遮大会の設けられた持統二年(六八八)、公家百寮が天皇の病のために仏像をつくり、開眼したという持統十一年(六九七)、あるいは大宝年中(七〇一—〇四)などを当て、後者では従前からある養老・神龜年中(七一七—二九)説に加えて、最近和銅三年—養老二年(七一〇—一八)とする見解も現れている。

本稿はこれを正面から問題にするものではないが、葡萄唐草文の展開に限って見れば、薬師寺金堂台座のそれは、この系統の文様の初唐期の様相に対応するものである。

この唐草文は、台座正面の懸裳の裏から始まり、両側面を通り、背面の中央で完結するという構成をとる。一般に唐草文はどちらか一方にだけ向うものの他に、中央から始まり左右へ伸びるものと、両端から始まり中央で完結するものに分けられる。本例のように横



長の区画で、連続波状唐草となる葡萄文様の作例は限られているので、唐草の向きに時代性があるかどうかは一概にはいえない。数少い例を挙げると、敦煌石窟第三二窟(初唐)の龕縁の葡萄唐草文は、上部中央から始まって左右に分れ、両側面下方におりるという構成をとり、わが国の白鳳時代の葡萄唐草文軒平瓦(挿図12)は、必ず中央から始まり左右に伸びる。しかし新羅時代の軒平瓦のこの文様は逆に両端から発して中央で完結し、また天平時代初頭の法隆寺五重塔金棺の文様のように両端から伸びて、中央で接し合うものも登場する。少い資料から断定はできないが、薬師寺の文様は、唐草の向きという点でも初唐—白鳳風を承けていると推測される。

以上数節にわたって、薬師寺金堂須弥座上榎上段の葡萄唐草文の系統と位置づけをめぐって考察を加えた。

一般に、ある特定の文様を美術史的に考察する場合、その対象を、単一の種類の作品だけに限る方法と、限定せずに多くの作品から収集する方法とがある。前者は微妙な差異にも目を遣ることができが、このような恵まれた題材は稀である。本稿が後者を選んだのは、適切な資料の稀少さによることに他ならない。そのため、客観的に首肯しうる筋道だけを辿って、葡萄文様が別の展開を見せる様相については触れなかった。例えば、合成植物の一要素であった空想花が蓮と



挿図12 軒平瓦(岡寺出土) 黒川古文化研究所

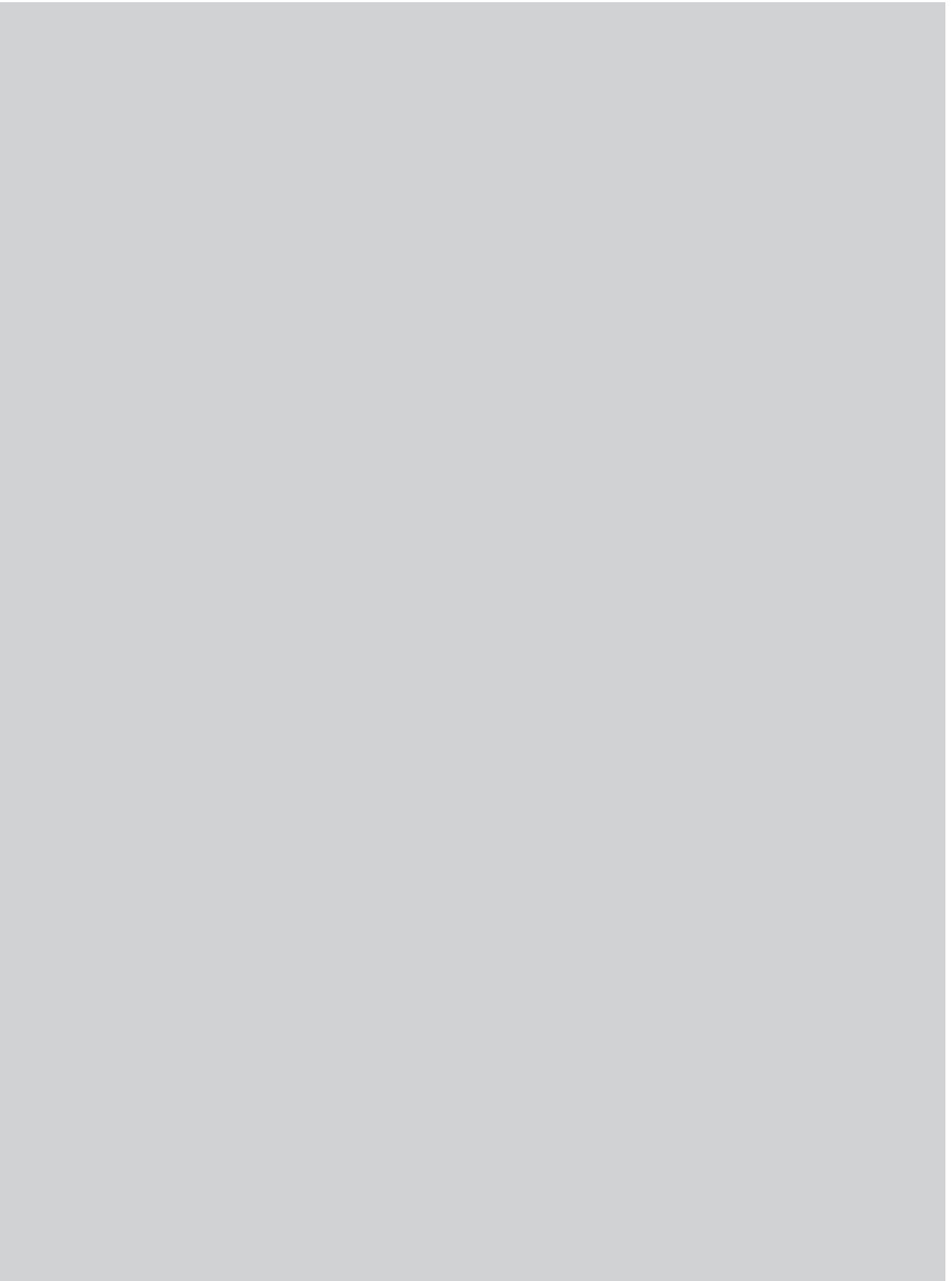
なり、蓮の荷葉から葡萄の果実房が生じるもの、あるいは果実房が減少または消滅して、葡萄の葉主体の文様となるものなどが挙げられ、いずれも別の意味で重要な文様体系を形づくったと私考される。しかしこれらは本稿のテーマから逸れるので、稿を改めて論じたい。

〈註〉

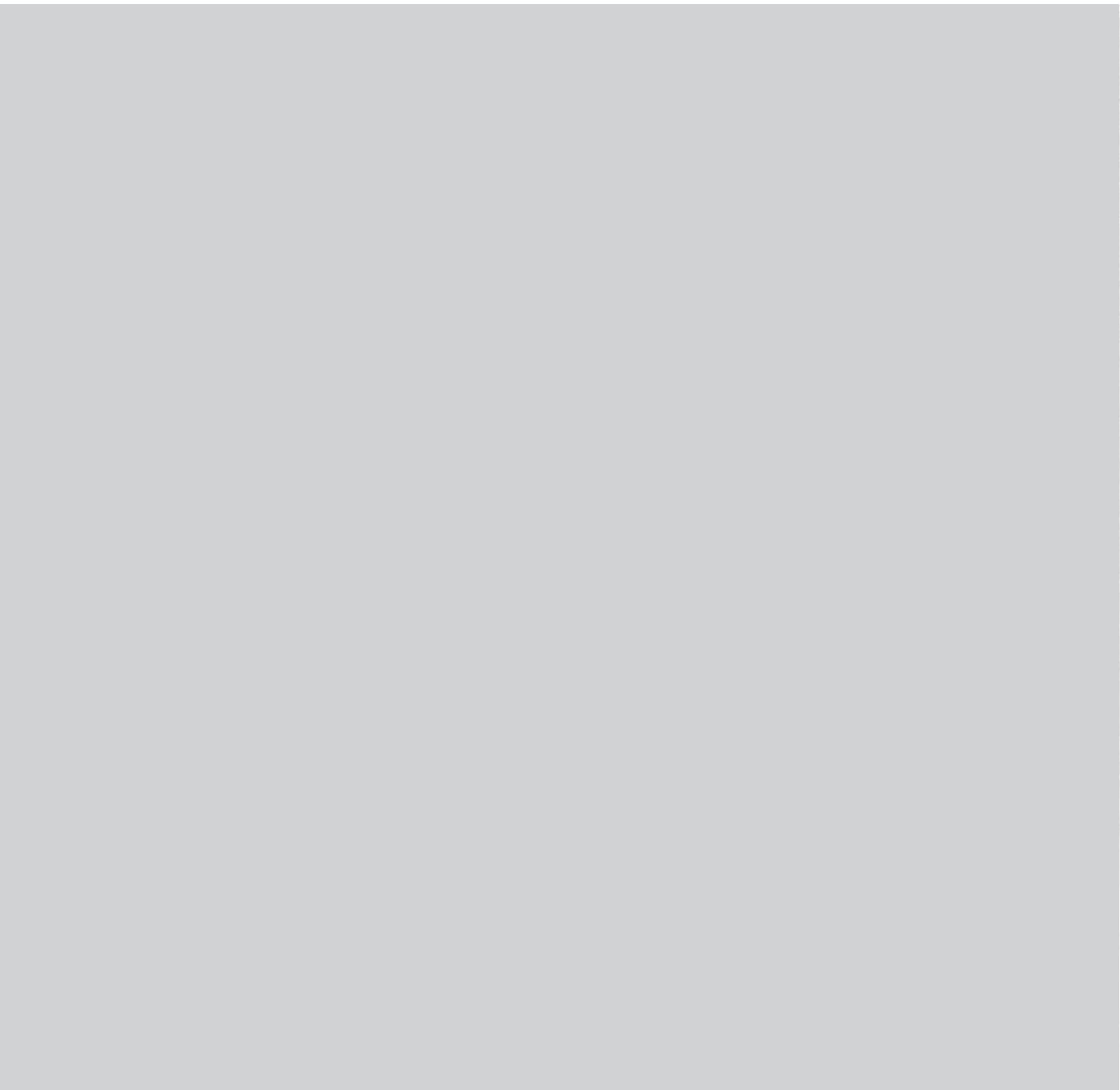
- 1 林良一「葡萄唐草文新考——イラン系瑞果文の東漸——」(『美術史』三三、昭和三十四年)
  - 同「薬師寺本尊台座の葡萄唐草文」(『国華』八一〇、昭和三十四年)
  - 同「葡萄唐草」(『仏教芸術』一一七、昭和五十三年)「仏教美術の裝飾文様」一一)
  - 2 『陝西省出土銅鏡』図一五一(文物出版社 一九五八年)  
この他の同形式のものに、中国河北省平山県西生溝出土の鏡(『河北省出土文物選集』図三三一 文物出版社 一九八〇年)、ウィンスロップ氏蔵鏡(『唐鏡大鑑』図八五)などがある。また周囲が完全な円形となるものに、『唐宋銅鏡』図六〇(中国古典芸術出版社 一九五八年)に所収のものがある。
  - 3 Oswald Siñén, *Chinese Sculpture III* (London, 1925) pl. 461A
  - 4 『書道全集』八(平凡社 昭和三十一年)図四六  
水本咲子「初唐の植物文様について」(『美術史』一一八、昭和六十年)
  - 5 『正倉院の金工』(日本経済新聞社 昭和五十一年)図一四解説  
この鏡は『東大寺献物帳』に  
八角鏡一面、重大五斤十三兩、徑一尺一寸三分、花鳥背緋  
絶帯、漆皮箱、緋綾兜盛  
とあるものに相当する。寛喜二年(一二三〇)の盗難により破損を蒙った。
- なお、これと同形式の鏡が、西安東郊墾垣塚第〇二号墓から出土しており(『陝西省出土銅鏡』図一四九)、また白鶴美術館にも蔵されている(『古鏡聚英』下 図一八一)。また、舶載鏡でありかつ長徳三年(九九七)の銘のある鳥取・三仏寺の鏡像の背には、葡萄が蓮に変えられた同趣の意匠がある。

- 6 『新羅古瓦の研究』 図五二八(京都帝国大学 昭和九年 『京都帝国大学文学部考古学研究报告』 一三)  
『夢殿』 一八 附図(昭和十三年)
- 7 Krishna Riboud et Gabriel Vial, *Tissus de Touen-houang* (Paris, 1970) p. 22
- 8 藤原武二「薬師寺金堂基壇の発掘調査」(『奈良国立文化財研究所年報』 一九七二)
- 9 中野政樹「几帳金具(金銅装唐組垂飾)について」(『ミューゼウム』 一六〇 昭和三十九年)
- 10 林良一「法隆寺五重塔塑造金棺の葡萄唐草文」(『国華』 九一七 昭和四十三年) や林氏の諸論文に描き起し図が掲げられる。
- 11 松山鉄夫『薬師寺』(小学館 昭和五十八年 『名宝日本の美術』 六)
- 12 近江昌司「葡萄唐草紋軒平瓦の研究」(『考古学雑誌』 五五の四 昭和四十五年)

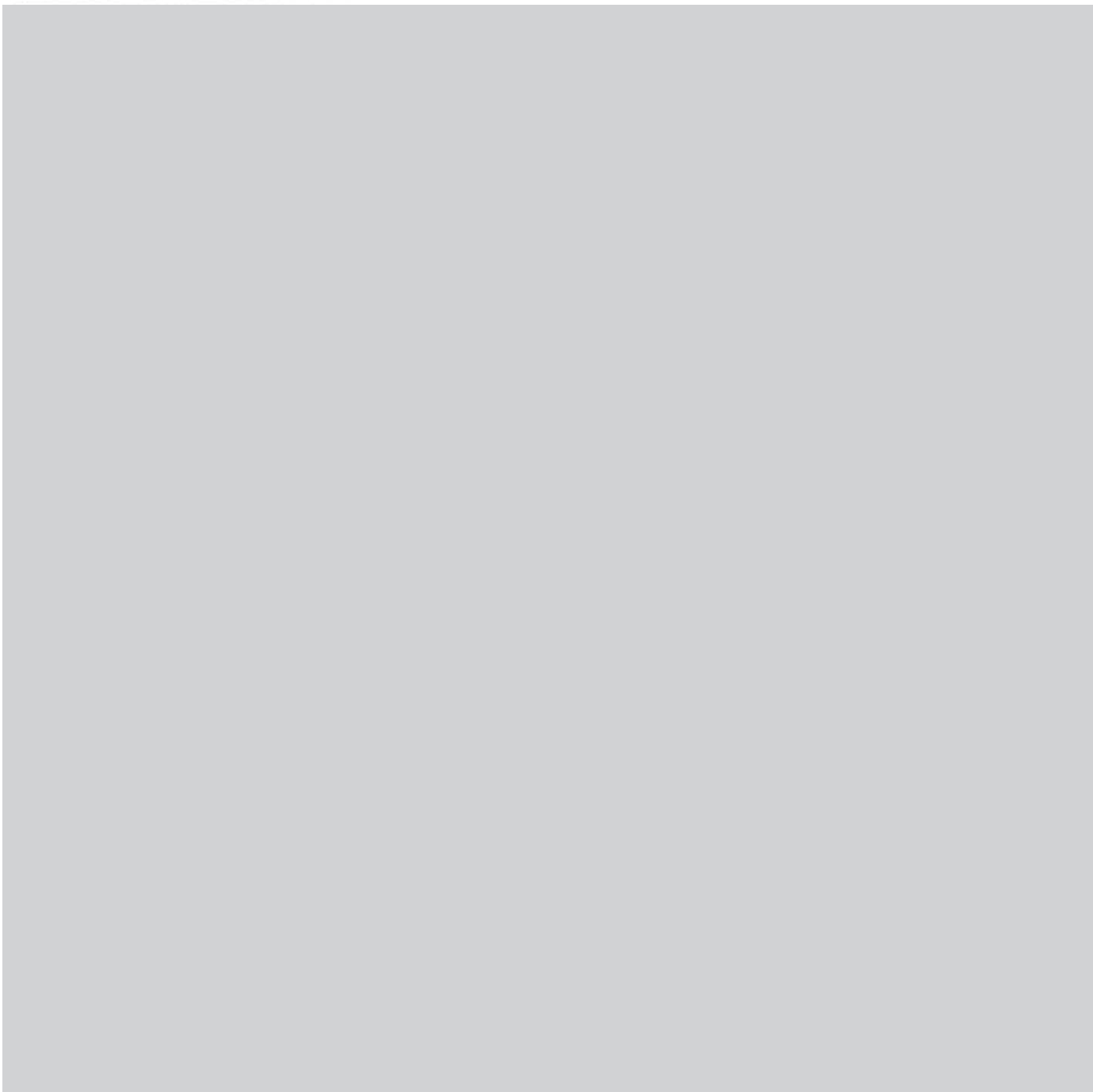
この論文によれば、日本では天平時代に入っても、中央から発して左右に分れる構図の葡萄唐草文軒平瓦があり、引き続き新羅とは逆の文様が行われていたらしい。







2 花枝八花鏡 泉屋博古館



3 鸚鵡花枝八花鏡 正倉院